

WH - 不定感嘆表現について*

阿 戸 昌 彦

1. はじめに

Elliott (1974: 242) は、「感嘆表現の『機能 (function)』は異常であったり、予期していなかった状況について語ることである」という。したがって、いつもだらしない服装をしている友人がとてもきれいなドレスを持っているのを見たときには、以下のいずれの例も使うことができる。しかし、きれいなドレスばかり着ている人に対して使うと、嫌みを言っているようで、純粹に感嘆を表しているとは言えない。¹

- (1) a. What a beautiful dress!
- b. What a beautiful dress you have!
- c. What a beautiful dress (for you) to have!

(1 a-c) のどれもが自然に使うことができるとは言っても、意味がすべて一致しているわけではない。(1 a) は、きれいなドレスそのものに対する驚きであり、(1 b, c) は、(きれいなドレスを) 持っていることへの驚きを表す。しかし、これらが (1 a) に近い驚き、すなわち、ドレスを持っていることよりも、そのドレスそのものへの感嘆と取ることも可能だという (母国語話者の判断による)。

(1 b) と (1 c) は同じ意味解釈を受けるだけでなく、一見したところ、構造的にも類似しているように見える。ところが、次節で明らかにするよ

うに、同じ構造をしているとは考えられない。むしろ、(1c)は(1a)に近い構造をしている。

本稿では、構造的には(1a)、意味的には(1b)に似た(1c)のようなwh感嘆表現について考察する。

2. 従来の分析

前節でみたように、英語のwh感嘆表現としては、(2)のように定形の要素がwh句に後続しているものばかりではなく、(3)のように、to不定詞として顕在している場合もある。²

- (2) a. What a beautiful flower *you have* !
 b. What a long time *we have been waiting* !
 c. What a tragic thing *happened* !
- (3) a. What a beautiful flower *for you to have* !
 b. What a long time *for us to have been waiting / to be waiting* !
 c. What a tragic thing *to happen* !

Grimshaw (1977) にならって、(3)のようなwh感嘆表現を不定感嘆表現 (infinitival exclamations (以下、IE)) と呼ぶことにしよう。また、(2)の感嘆文を時制感嘆表現 (tensed exclamations (TE)) と呼んでIEと区別することにしよう。

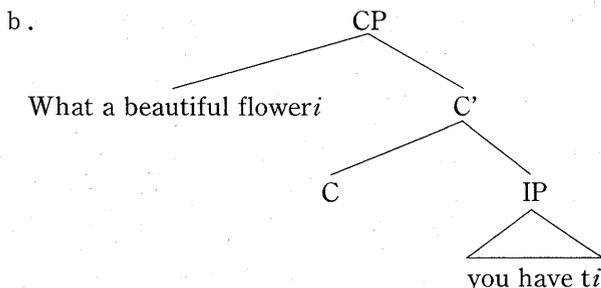
まず、(2a)の構造を簡単にみておこう。(4)のように、TEはCPしか許さない位置に生起しうることから、wh疑問文と同じように、wh句がCPの指定部 ([Spec, CP]) に移動して派生されると仮定されてきた (Postal (1971), Jackendoff (1972), Radford (1981, 1988)).³

- (4) a. I don't care what an incredible height the building is.

- b. I don't give a damn what an outrageous size his salary is.
 (5) a. *I don't care the incredible height of the building.
 b. *I don't give a damn the outrageous size of his salary.
 (4-5 from Grimshaw (1979 : 302))

例えば、(6 a) は概略すると (6 b) のような構造を持つと考えられている。

- (6) a. What a beautiful flower you have! (=2 a)



Chomsky (1992) で提唱されている照合理論に従うならば、英語の *wh* 感嘆文の *wh* 句は *overt syntax* で移動しているので、C にある感嘆の素性は、もし、あると仮定すれば、強いと考えられる。強い素性は PF で見えてしまうので、その素性と *wh* 句の素性を照合するため、[Spec, CP] への移動が駆動されているのである。

しかし、IE を CP とし、感嘆句の *wh* 移動で派生されたとすることには問題がある。一般に、不定詞節は(7)に示す動詞の補部や、外置節、不定関係節、不定同格節のように、従節としてのみ生起可能であって、(8 a, b) のように独立して生起することは許されない。

- (7) a. John arranged for us to win.
 b. It is necessary for you to study hard.

c. John bought a book *for Mary to read*.

(Berman (1974 : 37))

d. The appeal *to give blood received strong support*.

(Quirk *et al.* (1985 : 1271))

(8) a. *For John to read a magazine.

b. *To study English hard.

不定疑問節が独立して使われることもないのであるから、wh 移動によって許されるようになるということもできない。

(9) a. *What to eat?

b. *Which book to buy?

次に、Chomsky and Lasnik (1977) 以来、doubly-filled COMP filter としてよく知られているように、現代英語では、音形を持った補文標識と wh 句が共起することができない。

(10) a. *I know the man *who that* you met yesterday.

b. *I found a topic *on which for* John to work.

TE はこの共起制限を遵守していることから、wh 感嘆句が [Spec, CP] にあることが示される。

(11) a. *What a lot of cakes *that* you ate!

b. *What a pretty dog *which* you have!

一方、IE では (感嘆句ではない) 主語が音形を持って現れるときには、補文標識 *for* が生起しなくてはならない。

- (12) a. What a terrible thing *(for) you to say!
 b. What a beautiful dress *(for) you to wear!

もし、IEの感嘆句も [Spec, CP] にあるとすれば、この共起制限を破ることになる。しかがって、wh感嘆句と *for* の共起が許されるには、wh感嘆句は(13)のように CP の外になくなくてはならない。

(13) Wh-phrase_i [CP ... t_i ...]

以上のことからだけでも、IEが、TEと同等に扱えない特異な構文であることは推測できよう。

また、IEは、wh感嘆句になれる要素が限られている点でも特異である。TEでは、名詞句、形容詞句、副詞句のすべてが感嘆句として認めるが、IEが感嘆句として認めるのは名詞句に限られている。⁴

- (14) a. How delightful her manner are!
 b. *How delightful for her manner to be!
 (15) a. How I used to hate geography!
 b. *How (for me) to hate geography!
 (16) a. How quickly you ate!
 b. *How quickly for you to eat!

(a sentences in 14-16 : Quick *et al.* (1985 : 833-834))

TEでは可能な句の感嘆化ができないのであるから、IEの感嘆句に限って名詞句に限るような、何らかの制約が必要になってしまう。

また、感嘆化された名詞句が不定冠詞と限定用法の形容詞句を持つとき、TEでは、形容詞が *how* に導かれて冠詞の前におかれることがある。しかし、IEでは、個人差はあるものの、形容詞を前置すると、容認度が下がってしまう傾向にある。⁵

- (17) a. What a beautiful flower you have / for you to have!
b. How beautiful a flower for you to have! (OK / ?? / *)
(c の () 内は母国語話者の判断)

IE は、埋め込まれた位置に生起できない点でも TE と異なっている。

- (18) a. It's incredible what an attractive woman she is.
(Elliott (1974 : 235))
b. *It's incredible what an attractive woman (for her) to be!
(19) a. They didn't know what a crime he had committed.
(Quick *et al.* (1985 : 1055))
b. *They didn't know a crime to have committed.

TE が埋め込み節として生起可能な場合はかなり限られているが、TE の埋め込みを許し、かつ、*to* 不定詞節を補部を取る場合でも IE の生起は許されない。

以上の観察により、IE は感嘆化された名詞句に不定詞節 (CP) が後続している構造 ([_{NP} wh-phrase] *i* [_{CP} ... *ti* ...]) をしていることが明らかになった。このような IE の構造は (少なくとも表面上は) 関係節構造に似ている。

次節では、何故、IE が名詞句構造であるにもかかわらず、TE と同じような文としての解釈を持つのか、さらに、いかにその構造が可能になったのかを考えることにする。

3. IE の派生

冒頭で、TE が CP でありながら、wh 感嘆化された単独の名詞句と同じ解釈も受けうることを見た。この点について別の例でみてみよう。

例えば、自分の子供が目上の人にとっても汚い言葉遣いをしたとしよう。そのとき、CPであるTE (20a)は、自分の子供が汚い言葉遣いをしたことへの驚きと、汚い言葉そのものへの驚きとで多義である。

(20) a. What a terrible word you said!

b. What a terrible word!

いっぽう、NPである(20b)は後者の意味(すなわち、汚い言葉への驚き)しか持たない。

すなわち、ある時期までに習得した文法でIEを派生できない段階では、名詞句単独で感嘆表現として具現したものはCPとして具現したものよりも表現力に劣るという状況にあると考えられるのである。そこで、TEが持つ意味を名詞句によっても表現できるようにしようとする力が働くと仮定しよう。

また、名詞句単独の感嘆表現は、感嘆という性質上、他の名詞句にくらべて修飾されにくい。⁶そこで、修飾要素をとれるようにしようとする力が働くと仮定しよう。ここで、注意すべきなのは、ただやみくもに修飾要素を付けるのではなく、欠けている意味を表現できる形でなくてはならないということである。

TEが表面上には、名詞句に関係節が付加しているのと同じ構造をしていることに注目しよう。英語には定形の関係節の他に、不定詞節が関係節として機能する。ところが、すでに定形の関係節に似た構造がTEで具現している。そこで、句を修飾する要素を広げる手段として、不定関係節が候補となる。仮に、不定関係節が名詞句に付加し、IE (21)が派生的に生じたとしよう。

(21) [_{NP} [_{NP} what a terrible word] *i* [_{CP} OP *i* for [_{IP} you to say *ti*]]]

空演算子 (OP) は叙述規則 (predication rule) により、wh 感嘆句と同一指示であることが決まる。このとき、関係節を持たない時と違い、間接的に wh 句に関係節内での意味役割が与えられる。この結果、欠けていた意味を獲得すると共に、修飾の手段も広がる。

以上のような分析を仮定すると、IE の特徴が帰結として説明される。まず、間接感嘆文になれない点からみてみよう。ここでの分析によれば、IE は名詞句であるから、動詞や形容詞が CP のみを c-select する場合には IE は生起できないことになる (cf. Grimshaw (1979), Pesetsky (1982))。

(22) a. *I don't care the expensive ring.

b. *I don't care what an expensive ring for you to buy.

また、少なくとも英語では、wh 感嘆句の前置は overt でなくてはならないことから、基になるべき wh 感嘆句単独でも補部位置に生起しえない。したがって、その派生体である IE も生起できないとも考えられる。

(23) a. *You know what a beautiful dress!

b. *You know what a beautiful dress for John to buy!

形容詞句、副詞句が感嘆句の時に IE が派生されない事実も、この分析から説明される。確かに、(24) のように形容詞句が単独で感嘆を表すことができるし、TE もあるので、IE が派生されてもおかしくはない。

(24) a. How happy!

b. How happy I was!

しかし、例えば、形容詞が感嘆句の場合に IE が派生される時には、形容詞を主要部とする関係節構造が生ずることになる。しかし、形容詞が主要部

の関係節自体、英語には存在しない。モデルとなる関係節構造がないのであるから、IE も派生されないことになる。⁷

この節を終える前に、不定詞補部を取る形容詞が限定用法で使われる場合について触れておこう。次の例を考えてみよう。

- (25) a. What a difficult book to read!
 b. What an easy question to answer!
 (26) What a pretty girl to look at!

(25) (26) は、いわゆる tough 類の形容詞、pretty 類の形容詞をそれぞれ持っている。これらの形容詞は不定詞補部との結びつきが強く、よほど状況をうまく設定しないと IE としての解釈はない。例えば、(25 a) は、「なんと読みにくい本だ」という解釈が強く、「なんと難しい本を読んだんだ」という IE の解釈はされにくい。また、前者の意味にはなるが、滅多に使うことはないというインフォーマントの統一した判断であった。

(26) も「なんとかわいい女の子を見たんだろう」という、IE としての解釈はされにくく、女性をからかうような意味に取られてしまう傾向がある。これは形容詞の補部として基本的な性質の方が派生によってできた形よりも優先されてしまうというためであろう。

4. おわりに

本稿の分析では、完成された大人の文法だけでなく、習得過程の中間段階の文法を考慮することが必要である。これは、文法習得の途中の段階で、文としての wh 感嘆表現と、wh 名詞句としての感嘆表現しか生成できない状況があると仮定し、その状況での欠陥を派生という形で補おうとする力が生ずるからである。

この分析が正しいとするならば、さらに研究がすすめば、Kajita (1977)

以降開発中の動的な文法理論の枠組みの中で IE の解明をすすめることができると思われる。

しかしながら、(18c) のような例では何故、容認度に揺れがあるのかが未解決であるなど、さらなる考察、研究が必要である。

注

* 本稿は、1994年6月25日に上智大学で開かれた東京英語学談話会での口頭発表の一部に大幅な加筆、修正を加えたものである。その際、梶田優先先生、宇賀治正朋先生には貴重なコメントをいただいた。また、例文の判断に関して、特に Lisa Vogt 女史にお世話になった。ここに記して感謝したい。

1. 文法的には誤りではないが、感嘆表現が状況によっては奇妙に聞こえることがある点について、詳しくは Elliott (1974) 参照のこと。
2. wh 句に *to* 不定詞が後続しているからといって、そのような例のすべてが IE であるわけではない。(i) は (ii) の斜字体部が省略されたもの、つまり、TE の省略形であって、本稿で扱う IE ではないことに注意されたい。

- (i) a. How good to help ladies!
b. What a fool man to go such a place!
- (ii) a. How good *it is* to help ladies!
b. What a fool man *you are* to go such a place!

3. 最近では、Culicover (1992) が従来の CP を CP と PolP (Polarity

Phrase) に細分化するなど、Split-CP 仮説が数多くなってきた。したがって、単純に C にその素性があり、wh 句がその指定部に移動したとするのは問題があるように思われる。また、Minimalist Program の枠組みを使った感嘆表現の考察は稿を改めることとする。

4. 従来の名詞句は、厳密には決定詞句 (Determiner Phrase:DP) と言ふべきであろうが、特に問題がない限り、名詞句 (NP) と呼ぶことにする。
5. 形容詞が不定冠詞 *a/ an* に先行するのは、TE に限った性質ではないことに注意されたい。

(i) a. I've never known so good a man.

b. It's so long a way!

(Bolinger (1972 : 87))

6. 天沼実氏の指摘による。また、母国語話者の同意も得られた。
7. 自由関係節 (free relatives) では、形容詞が主要部となっているように見える例がある。このような例が IE の派生に関わるかどうかは不明である。

(i) George will make the cake [*however big* you want it to be].

(Baker (1989 : 170))

引用文献

- Baker, Carl L.1989. *English syntax*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
Berman, Arlene.1974. Infinitival relative constructions. *CLS* 10.
37 - 46.
Bolinger, Dwight.1972. *Degree words*. The Hague: Mouton.

- Chomsky, Noam. 1992. A minimalist program for linguistic theory.
MIT Occasional Papers in Linguistics 1.
- Chomsky, Noam, and Howard Lasnik. 1988. Filters and control.
Linguistic Inquiry 8. 425 - 504.
- Culicover, Peter W. 1992. Topicalization, inversion, and
complementizers in English. Ms. : The Ohio State University.
- Elliott, Dale E. 1974. Toward a grammar of exclamations.
Foundations of Linguistics 11. 231 - 246.
- Grimshaw, Jane. 1977. English wh-constructions and the theory of
grammar. Doctoral dissertation, University of Massachusetts,
Amherst, Mass.
- Grimshaw, Jane. 1979. Complement selection and the lexicon.
Linguistic Inquiry 10. 279 - 326.
- Jackendoff, Ray S. 1972. *Semantic interpretation in generative
grammar*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Kajita, Masaru. 1977. Towards a dynamic model of syntax. *SEL* 5.
44 - 76.
- McCawley, James D. 1988. *The syntactic phenomena of English*.
Chicago: the University of Chicago Press.
- Pesetsky, David. 1982. Paths and categories. Doctoral
dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Postal, Paul M. 1971. *Cross-over phenomena*. New York: Holt,
Rinehart and Winston.
- Quick, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoferry Leech, and Jan
Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*.
London and New York: Longman.
- Radford, Andrew. 1981. *Transformational syntax*. Cambridge:
Cambridge University Press.

阿 戸 昌 彦

Radford, Andrew. 1988. *Transformational grammar: a first course*.
Cambridge: Cambridge University Press.